

# 福岡・在自西ノ後遺跡

1 所在地 福岡県宗像郡津屋崎町大字在自字西ノ後

2 調査期間 第三次調査 二〇〇三年（平15）四月～六月

3 発掘機関 津屋崎町教育委員会

4 調査担当者 田上浩司

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 一二世紀中頃～一三世紀初頭

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

津屋崎町は、玄界灘に面する地理的環境により、古くから大陸系の遺構・遺物が出土する地域である。調査地は、玄界灘から約八〇



(津屋崎)

〇m入った低地に位置する。周囲は近世以降の干拓によって形成された埋立地であり、遺跡周辺は海に接するか、極めて近い位置であったと推測される。

本遺跡の特徴は、宋からもたらされた龍泉窯系・同安窯系の青磁、白磁、陶器

などの貿易陶磁器が多量に出土していることである。さらに、第一次調査・第二次調査では墨書を有するものも発見されている。第一次調査では「大」「二点」「十」「綱」の四点、第二次調査では「壽」「王千」の二点が出土している。「綱」は貿易商人である「綱首」もしくは貿易品の単位としての「綱」、「王千」は中国人名を指すと考えられており、宋との貿易に関係の深い遺物である。

当時の宗像地域と宋の関係が深かったことを示す事例は多い。例えば、遺跡に隣接して「唐防地」（古くは唐坊と表記）という地名が残っている。これは「博多津唐房」に代表される、宋人の居留地を指す地名とされている。さらに、当時の宗像大宮司家が宋の貿易商人の娘を二代にわたって妻として迎えていること、博多綱首謝国明が宗像社領である小呂島において、宗像社に対して社役を勤めるなどの関係を有していたことなどが挙げられる。まだ検討の余地は残るが、本遺跡は宋との貿易に関わる可能性が高い。

今回の調査で検出した遺構には、溝、井戸、土器溜り、土坑、柱穴がある。井戸、土坑の時期は、出土した土器から一二世紀後半頃に比定できる。これに対して溝、土器溜りは、鎬連弁文を有する龍泉窯系青磁碗のような一三世紀以降の土器が出土しており、時期的にやや降るものと考えられる。

木簡が出土した遺構は、径四mほどの円形の土坑SK〇九である。第二次調査で北側半分を調査し、第三次調査で調査区を拡張して残

り部分を調査した。深さ約1m、途中に一段テラスをもつ。遺跡所在地の地下水位が高いこともあって、井戸に用いられた板材・曲物は良好な状態で発見された。遺物においても、木簡以外の木製品もいくつか出土している。木簡は底付近から出土したが、湧水が激しかったため、正確な位置を確認することはできなかった。

共伴遺物は、土師器、瓦器、貿易陶磁器、木製品などで、松毬、木の枝なども含むことから、ごみ穴としての用途を推測している。出土した貿易陶磁器は一二世紀後半頃のもので、一三世紀までは降らない。ちなみに、先に紹介した「王千」「壽」の墨書磁器は、本遺構北半から出土している(第二次調査)。

## 8 木簡の釈文・内容

### (1)

・「きのかたに□  
□かりつくり□  
さの□くきは□  
・「このくきのかた□くり□  
□いそき□  
十二月初三□虎

(275)×52×4 019

### (2) ・「代 一貫二百」

・「百五十二年」

94×22×2 032

(1)は仮名書きの文書木簡の断片。下部が欠損するため原形を知りえない。十二月三日付で差出人は虎某、宛先は不詳である。文意は

取り難いが、裏面の「いそき(急ぎ)」から急用を連絡していると思われる。

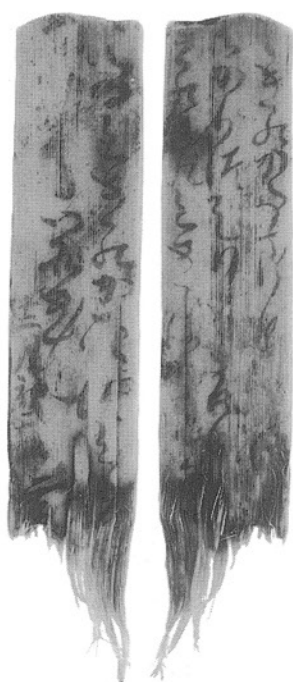
(2)は銭の付札。上部の両端に切り込みを入れ、下部は切り折り。当初は片面に一貫二百と書き、恐らく一二〇〇枚相当の銭に付けられたであろう。後に、二年に百五十文使用した、あるいは使用の結果百五十文に減っていたことを、裏面に記載したと思われる。ただ、二年まで続く年号は、一〇世紀の延喜年間(九〇一―九二三)から一三世紀半ばの文永年間(一二六四―一二七五)までの間には、日本では存在しない。中国南宋の年号に紹興(一一三一―一一六三)、淳熙(一一七四―一一九〇)があるが、関係するか否かは詳らかにし得ない。木簡の記載を銭貨の使用記録とみれば、「百、五十、十」「二年」と解釈することも可能である。

なお、木簡の釈文に際しては、奈良文化財研究所の綾村宏氏、渡辺晃宏氏、吉川聡氏、馬場基氏、山本崇氏、九州大学の佐伯宏次氏にご教示をいただいた。

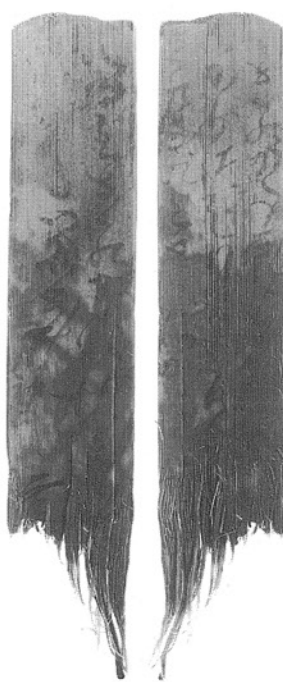
## 9 関係文献

津屋崎町教育委員会『在自西ノ後遺跡Ⅱ』(二〇〇四年)

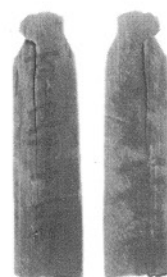
(田上浩司)



(1) 赤外線デジタル写真



(1)



(2)



(2) 赤外線デジタル写真



(酒井芳司・馬場 基)

### 木片の調達環境と木簡

『大宰府史跡出土木簡概報(二)』二二三号木簡下部の左側には枝が生えている。側面は曲面を呈し、樹皮をはいで多少の調整を加え、面取りをして平坦面を作ったと考えられる。

「木簡＝板材」が普通だが、書写の材料の木片は、木片調達状況に応じて多様であろう。造営工事などの木片が豊富な都城と、地方官衙では状況は異なる。地域による書写材料の調達方法の違いにも注目する必要がある。

なお、本稿は科学研究費補助金基盤研究S(「推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」研究代表者・渡辺晃宏)の成果の一部である。